

---

# 音楽情報科学研究会のページ

---

## 音楽情報科学研究会ホームページに関するお知らせ

2002年6月から音情研のホームページのアドレスが以下のように変更になりました。

また、これまでの運用担当していただいた後藤真孝さん（産業技術総合研究所）から引地孝文さん（NTT CS 基礎研）に交代しました。後藤さん長い間ありがとうございました。引地さん、これからよろしくお願ひします。今後内容を充実していきたいと考えています。

---

## 第47回音楽情報科学研究会開催のご案内と発表募集

日程： 2002年（平成14年）10月25日（金）～26日（土）

会場： 北陸先端科学技術大学院大学（〒923-1292 石川県能美郡辰口町旭台1-1）

<http://www.gm47.gm47.jp/> GMUS47/

発表申込締切： 2002年（平成14年）8月26日（月）必着

照会先： 西本 一志（北陸先端科学技術大学院大学）

\*照会はできるだけ email でお願いします。

昨年度まで「夏シンポ」として開催して参りましたものを、今年度は秋に開催の運びとなりました。懇親会は泉鏡花ゆかりの温泉宿「まつさき」にて、北陸の海の幸を楽しんでいただく予定としております。多数の皆様のご参加をお待ち申し上げます。

発表申込みは、上記宛で、以下の内容をお送り下さい。

- 発表タイトル
- 発表者氏名・所属（共同発表者全員のもの）
- 郵送先住所（郵送物送付先：住所は受取人氏名までお書き下さい）
- 連絡先（できれば e-mail, その他電話等, 急ぎの連絡が付きやすい手段）
- 簡単な概要（100字程度）
- 発表に必要な機材一覧

（液晶プロジェクタ, パソコンからのオーディオ出力機材を用意しています。その他に必要な機材が御座いましたら, ご相談下さい。）

詳細については研究会ホームページ（<http://www.gm47.gm47.jp/>）をご覧ください。

---

# FIT ワークショップ「蓮根：目指せ世界一のピアニスト」のお知らせ

**日程:** 2002年9月25日(水)～28日(土)  
(これはFITの日程です。蓮根はこの期間中半日の企画となります。)

**会場:** 東京工業大学

演奏生成システムの評価方法を模索していくためのイベント蓮根は、第一回が2002年7月6日(土)にICADのサテライトワークショップとして実施され、これまでの演奏生成および表情付け研究の総括、およびこれからのコンクールに向けての共通基盤作りについての議論を行いました。また、ここでは生成演奏に対して一般聴衆による投票を行ないました。2003年度より、本格的なコンクールを目指したコンクールとしての蓮根を開始するにあたり、第二回蓮根では生成する楽曲のジャンルを限定、指定し、それに基づいたシステムによる生成演奏や打ち込みによる演奏を聞き比べます。また、音楽学、情報科学の専門家、およびメーカーの方を迎えての生成演奏の公開審査や共通基盤の解説を行なう予定です。多数のご参加をお待ち申し上げます。

**照会先:** 平賀 瑠美 (rhiraga@shonan.bunkyo.ac.jp)

---

## 5月研究会の感想

音楽情報科学研究会主査 小坂直敏 (NTT)

5月18日・19日の二日間、音楽知覚認知学会と共催で図書館情報大学において第45回研究会が開催された。今回は同大学が筑波大学と近々統合する予定で、同大学の冠をつける最後の機会とのことである。発表は7セッション23件で行われた。音情研に属する発表をあえて数えると5件程度であり、共催ではあるがやや発表のバランスの悪さを感じた。これは、音知学会が年2度の開催の大会の中の一つ、という当研究会とは異なる研究発表会のスケジュールのため音知学会への集中、という理由もあろう。

以下、発表の一部の感想を述べる。

平田らの「GTTMに基づく音楽表現手法再考」はチュートリアル的な側面に時間がとられ、本発表で話題にすべき本質的な議論の時間があまりとれないことは残念であった。

難波らは「画像の中の円の落下と音の変化の共鳴現象」を論じた。円の動きと音との同期、音量などの議論はあったが動きと音高との関係が考慮されていないようで、やや不満を感じた。

紙谷らの「GPを用いたメロディ作成の一手法」では、評価が難しいと感じた。畝見らの「模擬育種法による作曲支援システムの試み」の研究も含め、作曲のアルゴリズムの提案は、ポップスの作曲している音楽家が出力した楽句の10%を許容できる、と評価したなど、どのような嗜好の作曲家がどのように評価しているか、という情報が必要であると感じた。

後藤らの「RWC 研究用音楽データベース：音楽ジャンルデータベースと楽器音データベース」の発表は研究発表ではなく、音楽データベースの紹介であるが、今回完結する、ということによって最後の発表となった楽音データベースも、その規模に大変迫力があつた。

長嶋らの「電気刺激フィードバック装置の開

発と音楽パフォーマンスへの応用」の発表は、会場での聴衆が手をつないでこの刺激を体験するなど文字通り刺激的であった。

調の知覚の問題は日大の三戸らの「調性的体制化が転調感に及ぼす影響」の発表と北大の松永らの「調知覚の手がかり」の研究の2件あつた。音高（ピッチ）の知覚の問題も難しいが、調性感の問題はさらに難しく思う。調性感に対しての個人差はかなり大きいと思われる。被験者をせいぜいソルフェージュを学習したもの、というあらかじめくくりでまとめていることも気にかかる。対位法などの音楽理論から導く方法もありそうだが、この辺も議論してほしかつた。

米津の「ピアノ熟達者における主観評価と聴取者における客観評価との相関性について」は、演奏者と聴衆の評価について論じている意味では両方とも主観評価である。発表ではセンサ系を用いた演奏情報データの収集についても論じたが、予稿には記録されていないのが残念である。また、発表では予稿に記載されていることを跳ばしていきなり結論にいつてしまったため、せっかくの魅力的な話題が聴衆がうまく議論に参加できず残念であった。

田口の「ピアノ演奏における運動感の表現：モーツァルトのピアノソナタ K.311 による定量的研究」は、発表者の本楽曲へのなみなみならぬ愛着を強く感じた。和声的要素が単純ともいえるモーツァルトを選ぶことは、運動感の表現を考える上で和声のパラメータを単純化することができて好ましいかと思つた。ここでデモされる演奏は、表情なしの演奏に比して格段にいいのだが、例えば内田光子氏の演奏よりはもちろん劣る。ここは、どのような演奏レベルを達成できたのか、また今後達成したいのか、という点が知りたかつた。

山本らの「演奏における表情的逸脱とその

ルールについて」はグリーグのピアノコンチェルトを題材にして何人もの著名なピアニストの演奏を比較検討したものである。アゴーギグ、ディナーミクなどの検討が行われていたが、やはりCDから収集した、ということではフィールドデータの比較、という研究スタイルであった。ピアニストを実験室に呼んで各種の弾き方を検討する、という方法もあったのではないか、と思った。

太田らの「言語知識の基づく印象尺度の設計」は、たいへん緻密な考察を行いながら印象語を取捨選択、統合などして整理していった。その手堅い進め方には頭が下がった。しかし、これらの結果を具体的にどのように使うのだろうか、とも思った。音楽の理解とか感動は筆者は必ずしも言語と結び付ける必然性は感じていないため、印象を言語に強制的に投影する、という側面がありはしないか、という感想ももった。

小川らの「発車サイン音楽のフィールド調査-山手線一周調査を例に-」は、関東住まいの筆者が日頃鳥の声、風の音と同様に、今や環境に溶け込んだ音として無意識に受け入れる電車の発車サイン音を扱った研究でテーマとして大変おもしろいと思った。これまで続けてきた検討で、今回は集大成であった。

星野の「歌の聴取印象と再認記憶」はさくらの歌をオーケストラで聞いたときにそれまでのこの歌の印象とまったく異なり悲しい印象を得た、との著者の体験から言葉とメロディとの関係を探査した研究報告である。しかし、フロアからはこの原体験そのものに対する解釈への疑問も出され、今後の展開への期待も生まれた。

山崎の「音楽による感情のコミュニケーション(2)-未経験者の表出ルールと解釈ルール-」は打楽器による即興的に感情を表出した演奏に対する聴取者の印象評定に関する議論で、一見(一聴?)太鼓をたたただけで喜び、悲しみ、怒りがわかるのか、という疑問を発表者はデモでその答えを示してくれた。デモではおおざっぱな感情はよくわかった。今後の研究も期

待したい。

加藤らの「声楽家の演奏スタイルと音場との時間的融合に関する研究」は、いろいろな唱法により最適な残響時間は異なる、ということを実例とともに示したものである。ただし、残響のパラメータは遅延時間だけではないので、もう少し多くのパラメータを扱った上で議論してもらおうよう期待する指摘がフロアからもなされた。基本パラメータを基にする議論と、具体的なホールのシミュレータのパラメータセットで論ずる方法と二つの方法がありそうだ。

三浦らの「単旋律ギター演奏における最適押弦位置決定システムの構築」は実際のギター奏者の押弦を参考にして適切な位置を与えるアルゴリズムについて論じたものである。こうしたアルゴリズムが実用化されれば譜面からギター譜が自動的に起こされるわけで、この効能は問わずもがなである。こうした楽器演奏の初心者のためのツールは大変喜ばしいものである。

以上、大変盛りだくさんの発表の感想を述べた。しかし、一件あたり25分の持ち時間であったため、質疑にもう少し時間がほしい議題も多くあった。実際フロアからの質問のいくつかを打ち切ることも多かった。必ずしも全部の議論が噛み合ったわけではないが、2学会の研究会の交流が懇親会も含めて十分に行われたように思う。

最後に、研究会の会場で多大に御世話になった平賀さんにお礼を申したいと思います。発表者の交代がたいへんスムーズにできるなど随所で工夫を重ねていただきました。